

国語

1 全般的事項

問1 国語科の目標や具体的事項の改訂で重視されているのはどのようなことか。

目標の改訂は、教育課程審議会答申の中に示された国語科の改善の基本方針を踏まえ、次のような点を重視して行われた。

- (1) 互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う力を育成すること。
- (2) 社会人として必要とされる言語能力を確実に育成すること。

特に、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面に応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てること。

- (3) 文学的な文章の読解に偏らず、様々な文章を読んだり、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てたりすること。

これらは、小・中・高等学校を通じた言語の教育としての立場を重視することなど、現行の考え方を継承しつつ、「伝え合う力」の育成を新たに加えたものである。

具体的事項の改訂では、今回の改訂の趣旨を生かし、目標に示されたねらいが十分達成できるよう、次のようなことが重視されている。

- (1) 選択履修の一層の柔軟化

生徒の実態に応じた一層適切な教育課程が編成できるよう、現行の8科目から6科目に再構成し、必修科目については「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」のいずれかを選択的に履修するものとされている。

- (2) 領域構成の変更

現行の「表現」及び「理解」の各領域と〔言語事項〕の構成を改め、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の領域と〔言語事項〕の3領域1事項へと再構成されている。また、「国語総合」においては、各領域の指導が調和的に行われるよう、それぞれの領域の指導時数の目安が示されている。

- (3) 言語活動例の提示

各科目における実践的な指導の充実を図る観点から、それぞれの「内容の取扱い」において、具体的な言語活動例が示されている。

問2 国語科の新教育課程の編成及び実施上の課題はどのようなことか。

国語科の新教育課程の編成及び実施においては、次のような課題が考えられる。

- (1) 社会人として必要な言語能力の育成

自ら学び自ら考える力など生きる力の育成を目指す観点から、社会人として必要とされる言語能力の基礎を確実に育成する必要がある。

このねらいに直接対応する科目としては、「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の2つ

の科目が位置付けられているが、「国語総合」や「現代文」においても、このねらいに対応した内容が取り入れられている。

(2) 新しい領域への対応、言語活動例の活用及び指導時数の確保

新しい領域は、国語科として特に重視しなければならない表現と理解の能力を調和的に育成するために設定されたものである。

この新領域での学習指導を効果的に展開するための契機となるのが言語活動例であることから、各学校では授業に実際に生かしていく必要がある。

また、「国語総合」では、話すこと・聞くことを主とする指導及び書くことを主とする指導に配当する時数の目安が示されており、これらの指導時間を確保することにより、それぞれの領域の指導を計画的に行う必要がある。

(3) 読むことの指導の在り方の改善

今回の改訂では、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改めることが強く求められている。また、教材についても、文学的な文章に偏ることなく、各領域にふさわしいものを調和的に取り上げることとされている。

これらのことを踏まえ、文学的な文章を扱う指導時数や様々な文章を活用した読むことの指導の在り方について、年間指導計画に適切に位置付ける必要がある。

(4) 科目の選択、科目の構成

国語科の教育課程の編成においては、国語の基礎・基本として、どのような言語能力を育てようとしているのかという明確な方針をもって、必修科目の選択や選択科目の組合せなどを決定していく必要がある。

また、今回の改訂では科目間の履修順序が示されていないことに留意し、選択履修を一層柔軟に進める必要がある。

さらに、学校設定科目を設置することにより、できるだけ多様で特色のある教育課程の編成がなされるよう、配慮することが大切である。

(5) 古典指導の改善

古典の指導においては、生涯学習の中で古典に親しむ素地を養うことが重要であることから、訓古注釈や古典文法指導に偏ることなく、古典の豊かな言語文化に触れさせることを中心に据える必要がある。

今回の改訂では、古典に親しむ指導を進めることがこれまで以上に強調されており、生徒の興味や関心を広げるよう、古典指導の改善を図る必要がある。

(6) 学校図書館等の活用、読書指導の充実、情報活用能力の育成

生徒の自ら学び自ら考える学習を一段と進めるためには、学校図書館等の活用を通しての読書力や情報活用能力の育成を図ることが重要である。

また、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段の活用を進め、学習効果を一層高める必要がある。

(7) 「総合的な学習の時間」に生きる言語能力の育成

国語科として、「総合的な学習の時間」の学習に生かすことのできる言語能力を育成することが大切である。

特に、「調査・研究、発表や討論」などの「問題解決的な学習」については、「国語

表現Ⅰ」や「国語総合」に言語活動例としても直接的に示されている。

2 国語表現Ⅰ、国語表現Ⅱ

問3 「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」の指導上の留意点はどのようなことか。

「国語表現Ⅰ」は、現行の「国語表現」及び「現代語」の内容を再構成し、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域を中心として内容を構成している。

また、この科目は、小学校及び中学校から一貫して育成することが求められている「伝え合う力」を高め、一層確かなものとして、社会生活に生かすことのできる言語能力を育成することをねらいとした、「国語総合」と並ぶ必修科目の一つである。

「国語表現Ⅰ」の指導上の留意点としては、次のようなことが挙げられる。

(1) 「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の関連を図った指導

必修科目としての位置付けに配慮し、例えば、「書くこと」の指導に集中して、「話すこと・聞くこと」の指導がおろそかになるなど、授業時数が一方に偏らないよう、配慮する必要がある。また、例えば、スピーチのための原稿を作ったり、聞いた話をまとめたりするなどの学習活動を取り入れることにより「話すこと・聞くこと」と「書くこと」を関連付けた、効果的な指導を工夫する必要がある。

(2) 実社会的な社会生活に対応した指導

話すことや書くことに関する指導の際には、目的や場に応じて、言葉遣いや文体などの表現を工夫することに配慮するとともに、発声の仕方、話す速度、文章の形式などにも配慮した指導が必要である。

(3) 言語文化と言語生活への理解を深める指導

言語文化を形成し続けてきた国語を正しく継承し、さらに、豊かなものにしていくため、古典の優れた表現法を指導の中に取り入れるとともに、現代の言葉と古典の言葉との同義、類義、異義などについて関連的に考えさせるなど古典の語句や語彙などの指導を取り入れることが大切である。

また、自他の言語生活を常に意識的に見つめ直すという習慣を身に付けさせるために、現代社会における多様な表現活動やコミュニケーション活動を踏まえて、言語生活の在り方や言語表現の役割について考えさせる必要がある。

「国語表現Ⅱ」は「国語表現Ⅰ」の内容を高めた選択科目であり、指導上の留意点は、「国語表現Ⅰ」と同様であるが、「国語表現Ⅱ」の内容の取扱いとして、生徒の実態に応じて「話すこと・聞くこと」と「書くこと」のいずれかに重点を置いて指導することができるものとされている。

3 国語総合

問4 「国語総合」の指導上の留意点はどのようなことか。

「国語総合」は、小・中学校国語と密接に関連し、高等学校国語の目標を全面的に受けた基礎的な科目であり、必修科目の一つとして設定されている。

現行の「国語Ⅰ」の内容を改善し、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の3領域と「言語事項」の学習を調和的に行い、総合的な言語能力を養うことを目指している。

「国語総合」の指導上の留意点としては、次のようなことが考えられる。

(1) 総合的な言語能力の育成

総合的な言語能力を養うため、適切な指導計画に基づき、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び「言語事項」について、相互に密接な関連を図り、多様な言語活動を取り入れながら、効果的な指導を工夫する必要がある。

(2) 調和のとれた指導計画の作成と指導時数の確保

「国語総合」では、各領域と言語事項の調和のとれた指導を行い、社会生活に生かすことのできる言語能力を育成する必要があることから、年間指導計画の中で、3領域1事項の指導を適切に位置付けておく必要がある。

特に「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の指導については、それぞれ、15単位時間程度、30単位時間程度の指導時間の目安が示されていることに配慮し、それぞれの指導時数を実質的に確保していく必要がある。

(3) 古典の授業時数の適正な配分

「国語総合」における「古典」の取扱いについては、古典と近代以降の文章との指導時数の割合は、おおむね同等とすることが目安とされていることから、各学校や生徒の実態に応じて適切に時数を配分する必要がある。

また、古典のうち古文と漢文の割合については、そのどちらも我が国の古典として重要なものであることから、どちらか一方に偏らないよう留意する必要がある。

(4) 小・中・高等学校の関連を図った継続的な言語事項の指導

「国語総合」の内容は、小・中学校国語と密接な関係を保ちながら、総合的な言語能力を一層伸ばすとともに、高等学校国語の基礎的、基本的な内容として位置付けられていることから、言語事項の指導に当たっては、中学校の指導の上に立って、継続的な指導を行い、各領域の具体的な活動を通して、その発展と深化を図ることが大切である。

4 現代文

問5 「現代文」の指導上の留意点はどのようなことか。

「現代文」は、近代以降の様々な文章を読む能力を高め、現代の言語文化を豊かに享

受できるような読書力を育成することをねらいとする選択科目である。今回の改訂においてもその基本的な性格は変わっていないが、教材には現代の社会生活で必要となる実用的な文章も取り上げることとされ、現代の複雑多様な言語生活に適應できる能力を育成することも重視されている。

「現代文」の指導上の留意点としては、次のようなことが考えられる。

(1) 情報を収集し活用する能力の育成

情報社会においては、目的や課題に応じた情報を適切に収集するとともに、それを自分の表現に役立てることができる能力を育成することが重要である。そのため、生徒や教師が学習の目的や課題を定め、その目的の達成や課題探求のために、様々な情報を収集して整理し、それに基づいて積極的な表現活動を行う必要がある。

(2) 言語活動を通した効果的な学習指導

「現代文」は、読むことの学習を中心にした科目であるが、話すこと・聞くこと及び書くことの言語活動を取り入れ、学習を効果的に進める必要がある。そのため、文章を読むことに関連して、要約したり感想をまとめたりすることや感想を発表したり話し合ったりするなどの言語活動の場を多く設けることが重要である。

(3) 読書指導の充実

読書指導においては、学校図書館等を計画的に利用するなど、生徒が書物に親しむ機会を多く設ける必要がある。

また、ある文章を読んだ後で、その文章に関連する様々な文章を読み、より広くかつ深い読みを目指したり、言語活動を取り入れたりすることなどにより、生徒が読書への興味を高め、読書意欲が十分に喚起されるよう、配慮することも重要である。

5 古 典

問 6 「古典」の指導上の留意点はどのようなことか。

「古典」は、現行「古典Ⅰ」及び「古典Ⅱ」の内容を再構成した選択科目であり、中学校の古典指導との一貫性を図りながら、生徒の能力や興味・関心に応じて、ある程度幅広く学習することにより、古文と漢文を読む能力を養い、ものの見方や感じ方、考え方を広げ深めるとともに、学習に積極的に取り組むことによって古典に親しむ態度を育成することを目指している。

「古典」の指導上の留意点としては、次のようなことが考えられる。

(1) 古文と漢文のバランスのとれた指導

古文と漢文は我が国の古典として共に重要なものであり、両方を取り上げて生徒に学習させることとされている。

また、今回の改訂では「古典」の履修は、「国語総合」の履修を前提としていないため、特に、低学年で履修させる場合には、古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり、取り扱い方に深淺が生じたりすることがないように配慮し、全体として両者

をバランスよく指導することが大切である。

(2) 言語活動を通した効果的な学習指導

「古典」の学習では読むことが中心となるが、語句の意味や文の解釈にとどまらず、例えば、音読、朗読や関心をもったことなどについて調べたりまとめたりするなど、いろいろな言語活動を工夫して、生徒が古典を学ぶ楽しさを味わい、主体的に学習に取り組めるよう、配慮する必要がある。

(3) 読むことの学習に即した文語文法の指導

文語文法の指導は、文章や作品の読みを確かなものにしたり、深く読み味わったりするために行うという基本的な考えに立って、文語文法の暗記指導に陥らないよう、工夫する必要がある。

また、生徒の実態等に応じて文語文法をある程度まとめた形で学ばせる場合においても、その必要性の有無を的確に判断するとともに、指導に当たっては、文語文法の暗記指導に陥らないようにする配慮と工夫が必要である。

6 古典講読

問7 「古典講読」の指導上の留意点はどのようなことか。

「古典講読」は、古典としての古文と漢文とに触れることを通して、我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てることをねらいとする選択科目である。今回の改訂では、様々な言語活動を通して、古典に触れる楽しさを味わうことや、古典の現代語訳などを適切な範囲で関連的に取り上げることにより、指導の工夫を柔軟に行うことができるよう、配慮されている。

「古典講読」の指導上の留意点としては、次のようなことが考えられる。

(1) 古文と漢文の弾力的な取扱い

「古典講読」の履修においては、古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができることから、生徒の実態や興味・関心等に応じて古文と漢文の取扱いを弾力的に行い、指導上様々な工夫ができるよう、配慮する必要がある。

(2) 言語活動を通した効果的な学習指導

「古典講読」の学習においては、単に文章の意味の読み取りにとどまらず、読み取った古人の思想や感情について、生徒自身が感じたり考えたりしたことを文章にまとめたり発表したりすることや、発展的に調査や読み比べを行うなど、言語活動を効果的に取り入れていく必要がある。

(3) 古典に触れる楽しさを味わう学習活動の展開

「古典講読」においては、詳細な読み取りの指導に偏ることなく、音読や朗読などによって古文や漢文の調子を味わわせたり、視聴覚資料などを用いて古人の生活様式や社会の様子などの理解を深めさせたりするなど、多様な学習活動を取り入れ、生徒の古典に対する興味・関心を大きく育てていくことが大切である。